

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑳

浅田 朋子

双子は小学三年生になり、学校から個人面談のお知らせがきた。

担任が作成した面談のリストがクラス代表を通じて配布され、指定された時間が都合悪い場合は、担任を介さずに保護者同士で調整する。

全学年同じ日に面談が行われるので、兄弟がいる家庭は調整が大変である。面談は担任と副担任も同席する。面談時間は6分と決められているが、やはりそこはイタリア、我が子のことで白熱して喋りまくる保護者がいるので最後の方は大幅に時間がずれてくる。兄弟がいる家庭では夫婦で手分けしているところも多い。

先の保護者会は全く気が進まなかったが、個人面談は短いながらも子供たちの普段の学校での様子などを聞ける唯一の機会なので、両方のクラスに夫婦揃って出席することにした。双子はA、Bクラスと分かれているので、他の保護者と時間を代わってもらい、20分の差を開けた。Bクラスは話好きな親が多いので(普段は楽しくていいのだが)大幅に時間が遅れると見越して、Aクラスより後の時間にした。

しかし、良い機会とは言え、双子の片方のBクラスの担任との個人面談は本当に気が重い。スパルタ教育で生徒をガンガン叱り、ものすごい量の課題をやらせ、生徒を恐怖に陥れている。笑わず顔も怖いので「鬼」と私があだ名をつけたこの担任は、親に対しても異常なほど威圧感があり、閉鎖された同じ空間にいること自体がとてもスト

レスになる。さらに早口なので、夫に「ちょっと頼むよ、聞き取り！」と言うと、イタリア人である夫ですら「ああ、憂鬱だなあ…」と呟いた。

個人面談当日、先に面談のあるAクラスの教室前に行くと、お母さんが2人待っていた。「時間通り？」と聞くと「ええ、もちろん！全く遅れてないわよ！」当然でしょ、と言う顔で答えた。Aクラスの担任はとてもきっちりとした先生で、親も時間を守る人が多い。「モンスターペアレンツ」がいて保護者会は大荒れだったが、こういう時Aクラスは非常に安心できる。私たちの面談時間も予定時間ぴったりに始まった。「なかなかやるなあ～Aクラス、日本並みの正確さやな」と夫にこそつと言うと「ふふん、イタリア人もやる時はやるんだよ」と、こんな小さなことで誇らしそうである。

Aクラスの担任との面談は短い時間ながら、担任の説明も的確で娘の様子がよくわかり、とても充実した内容であった。夫も「ああ、いい面談だったなあ～、優しくて良い先生だ」と満足そうであった。

お褒めの言葉も頂いたので、二人で足取り軽次の面談があるBクラスの教室に向かっていたが、廊下を曲がった途端、夫が「…ああ、現実に戻ったな」と呟いた。

Bクラスの教室前には、7、8人ほどの親が輪になって大声で喋っている。私たちを見ると「あー、きたきた！時間通り来ちゃったよ～」「もう40分も遅れてるのよ！！」とロベルトのママがイライラし

た様子で叫んだ。「今日は学校に泊まりだな・・」と、夫と私はげんなりして皆の輪に入った。面談は全部で 22 家族。今は 10 番目だが、すでに 40 分遅れである。キアラのママが「今夜は学校の食堂で夕飯ねー」と全く笑えない冗談を言った。こういう時、日本人なら「無理に仕事を早退して慌てて来たのにいい・・！」と歯軋りするところだが、彼らは「あ～、時間通りに来て失敗した、どこかに寄ってから来たらよかった～」と、仕事のことなんてちっとも気にしていないので羨ましい限りである。

時間を大いに持て余したママたちはワイワイと大声でおしゃべりを始めた。日本なら、特に面談の待ち時間は皆静かに待つと思うのだが、イタリアでは「どこでもバール！おしゃべりの音量は最大！周りなんて気にしない」のである。

話題はすぐに、5 月にローマの劇場で行われる子供たちの音楽発表会のことになった。この発表会はオペラをもっと身近に感じてもらい普及させる目的でプロの音楽家たちと小学生でモーツァルト作曲のオペラ「Flauto Magico (魔笛)」を発表するという、音楽団体の小学生向けのプログラムの一環で、私たちの学校も参加することになったのだ。誰もが一度は聞いたことがある「パラパラパッパッパッパッパッパッパッパッパッパー」と高音と低音が交錯するあの有名なオペラ曲を、子供たちは三年生になってから、一生懸命練習しているのである。小学生に「魔笛」をやらすこと自体に無理がある気がするが、なんとさらに追い討ちをかけるように、オペラの衣装は子供たちの親が作ること！とつい昨日学校から連絡が来たのである。

「オペラの衣装なんて作れるわけない・・！」「ちよっと、どうするの、みんな？」ロベルトのママが「魔笛の登場人物すら知らんわ！」と吐き捨てるように言った。

子供たちに人気があるのはやはり「Papageno (パパゲーノ・鳥刺し)」と「Papagena (パパゲーナ・老婆の姿だが実は若い娘)」である。「うちの子はパパゲーナやりたいって言ってるわ。でもどんな衣装かも知らないんだけど！」みんながワーワー言っていると、子供に配られている魔笛の楽譜にのっている登場人物のデザインを携帯で写真にとったママがいて、「ほら、これよ！」とみんなに見せた。一斉に覗き込む親たち。「こ、これ

は・・！」写真を見て皆絶句した。

パパゲーノは鳥刺しで、鳥に扮しているので全身に色とりどりの羽がついている。パパゲーノもパパゲーノに負けないくらい羽だらけである。「Aiuto!!」「どうすんのよ、この羽！！」「こんなの絶対無理、私ポタンも付けられないのに・・」他の登場人物も、子供が選びたい衣装は王子や神官、夜の女王などたいてい複雑である。「一番簡単な衣装は何なの？」と怯えた表情でキアラのママが聞くと「水と火やね・・全身、青か赤でいい・・」とマルコのママが遠い目をしながら言った。「水」と「火」なんか誰も選ばんやろ・・。ふと横を見ると、ジュリオのママが携帯電話で必死になって何かを調べている。「何、調べてんの？」と聞くと「アマゾンで売ってないか調べてる」と言う。無理！いくらアマゾンでもオペラの衣装なんか、特にパパゲーノの衣装なんか売ってるわけないやん・・。



【パパゲーノ Papageno】

オペラの衣装製作の話題が時間を潰すのに役立つ、あっという間に私たちの番になった。

教室に入ると「鬼」が無表情に座っていた。その

横に鬼とは正反対の、いつもにこやかで優しい副担任が座っていた。挨拶も早々に鬼が「そうね、勉強は平均的に良くできています。礼儀も正しいし、問題はないわね。」と威圧感たっぷりに言った。「そうですか…、それはよかったです…」と夫が聞き取れないくらい小さな声で答えた。「Interrogazione(口頭試問)は以前よりは声も大きく出して答えられるようになってきましたけど、何か心配なことでもあるのか、いつも自信がなさそうに怖がっているんですけどね?! 家庭で何か言いましたか?」と言い放った。いやいや、それはあんたが怖いから萎縮してるねん! 3ページほどの文章を暗記し、その内容に関する質問に生徒が答えるこの Interrogazione(口頭試問)は鬼が特に力を入れてやらせている課題だ。イタリアでは口頭試問で進級試験や卒業検定が行われることがほとんどなので、小学生の今から訓練をさせているのだろう。それはわかる…。でも、ただでさえ口頭試問は緊張するのに、恐ろしい顔で座るあなたを前にして答えるなんて、子供にはものすごいストレスなの! と意見したくなったが、私も鬼が怖くて何も言えない…。娘よ、ごめん。

面談は一方向的に鬼が喋って終了したが、大人しいが実は負けん気が強い娘の性格や、他の生徒との関係をよく把握しているなど感じた。

家に帰ると、娘がすぐに「ママ、鬼、怖かった? パパも怖かった?」と聞いてきた。「うん怖かったよ～」と言うと「ほら、ママもわかったでしょ、怖いでしょ」と言った。「ねえ、鬼って笑う時あるの?」と聞くと「Flauto Magico の歌の練習している時、笑って歌って、とってもかわいいよ。」と聞いた。

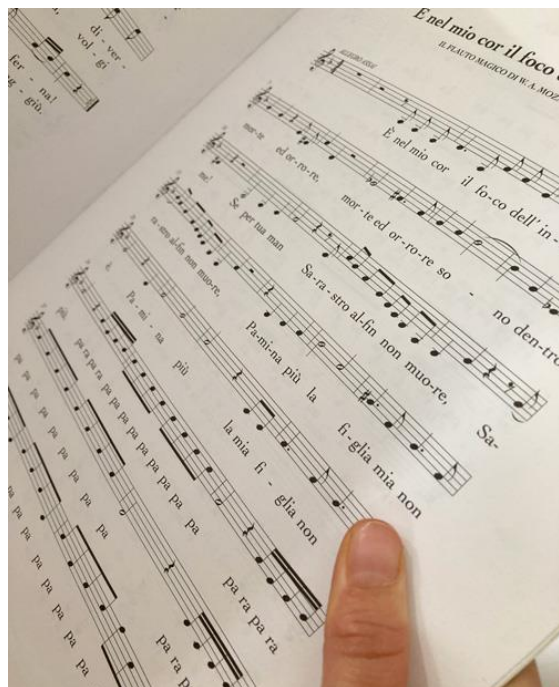
「鬼にも魔法がかかったのかなあ～。でも歌の練習がうまくできてないと、鬼、怒るんやろね?」「ううん、怒らないよ」「へえ～そんなこともあるんやね」と驚いていると「みんなすごく上手だって、たくさん褒めてくれるよ!」と嬉しそうに笑った。

実は、B クラスは入学当初、授業中に騒いだり喧嘩したり、集中できない生徒が多く、まともに授業も進められほどたくさん問題があった。さらにコロナ感染拡大での厳しい制限、そしてたびたび起こる学級閉鎖。過保護が加速する保護者に、子供に干渉すぎないようにと厳しく伝え、保護者とは距離を置いていた。数多くの問題を抱えなが

らも「鬼」は自分のやり方を貫き、はちゃめちゃで甘えたクラスを根気強く3年をかけ、自主性のある落ち着いたクラスにまとめ上げたのである。

イタリアでは小学校の5年間、クラス替えはなく担任も同じである。日本と違うこのシステムに最初は違和感があった。しかし、この5年の長い時間をかけ、先生は生徒のことをじっくり理解しクラスを成長させいくのである。保護者も、「鬼」がただの無愛想でスパルタの恐ろしい「鬼」ではなく、B クラスの「個性」をよく分かった上で、中学・高校進学を見据え、上手く指導する優秀な先生であるとわかってきた。

コロナ禍が終わるまで笑わなかった鬼。でもそんな鬼の真摯な思い、そして隠れた面白さに子供は気付いている。あと2年、実は笑うとかわいい「鬼」と一緒に、B クラスがどんなふう成長していくのか楽しみである。



【魔笛の楽譜】

(元当館語学受講生)

もし、小説家がペンギンと同居していたら

竹田 理乃

警部が車で街をまわっていると、警官のペトレンコがペンギンを連れて歩いているのに気が付いた。警部は車を止めて言った。

「何をしてるんだね。すぐにペンギンを動物園に連れていきたまえ」

「わかりました」とペトレンコ。

こうしていったん別れたが、二時間ほどすると、別の場所でまたペトレンコとペンギンに出くわした。警部は怒って、どなりつけた。

「さっきペンギンを動物園につれていけて言っただろ!？」

すると警官のペトレンコはこう答えた。「動物園にはもう連れていきました。映画にも行きました。これからサーカスに行くところです」

これ、イタリア児童文学の巨匠ジャンニ・ロダリーの作品だと思いませんか？

実は、ロシアの一口噺(アネクドート)なのです。翻訳家の沼野恭子氏が訳書『ペンギンの憂鬱』につけたあとがきで紹介されていました。

イタリアにもお巡りさんをからかう一口噺(バルゼツレッタ)はいろいろあって、たとえば「カラビニエーリがふたり一組で動くのはどうしてだか知ってる?」「さあ?」「ひとりでは文字が読めて、ひとりでは計算ができるのさ!」という辛辣なものを聞いた覚えがあるのですが、いくらイタリア最良の私でもこれはロシア語版のかわいげに軍配を上げたくります。

それにしても、動物園に行くペンギンとは。

とてもかわいい表紙に惹かれて手に取って見た『ペンギンの憂鬱』。登場するのは憂鬱症のペンギン)ミーシャ。飼い主である売れない小説家

ヴィクトル。どういうわけかヴィクトルが謎の男に託されて面倒をみることになってしまった女の子のソーニャ。この2人+1匹でキーウの動物園を訪れていました。作中にはセルゲイという気のいい警官も登場しますが、残念ながら動物園のシーンではお留守です。

主人公の小説家ヴィクトルによる、存命の人物の死亡記事をあらかじめ書いておくという奇妙な仕事をめぐる物語に、憂鬱症のペンギンを登場させようとしたのは、作者アンドレイ・クルコフ氏が冒頭の一口噺にインスパイアを受けたことによるそうなので、せっかくだから警官のセルゲイにも同行して欲しかったような気がします。



【『ペンギンの憂鬱』日本語版表紙】

出典：<https://www.shinchosha.co.jp/book/590041/>

もし、小説家がペンギンと同居していたら、どんなことが起きるんだろう?

なんだかロダリーの創作手引き『ファンタジーの文法』に紛れ込ませておいたら、うまく馴染みすぎて見失ってしまいそうです。ロダリーは同書の6章の冒頭で、ある有名な作品をくひとりの男

が目覚めてみると、自分がきたないごきぶりに変わっていたとすれば、どうなるだろう?)という問いを起点に紹介しています。この問いへのフランチ・カフカなりの答えが小説『変身』であり、ロダリーはこの問いを〈ファンタスティックな假定〉と呼んで、創作におけるもっとも単純な技術であるとしています。普段は接近することのない主語と述語を結びつければ、そこには異常事態が発生し、おはなしの登場人物たちや作者、また読者たちは、その異常事態に直面していくこととなります。そしてもちろん、みんなそれぞれに回答を持つことができます。

もし、嘘をつくと鼻が伸びる魔法にかかった木の人形が家出したら、どうなるだろう。このファンタスティックな假定の回答といえば、まずは最初にこの問いを投げかけたカルロ・コッローディの『ピノッキオ』が挙げられますが、ロダリーもまた子どもたちの力を借りて回答を試み、いくつもの可能性のなかから選んだ3つの結末を『羊飼いの指輪 ファンタジーの練習帳』に示しています。

ロダリーと子どもたちは、まず主人公のプロファイルから着手しました。ジェペットじいさんに作ってもらったコッローディのピノッキオは、鼻が伸びると驚いたり悲しんだりしますが、ロダリーと子どもたちのピノッキオは抜け目がありません。ピノッキオは木製です。嘘をつきだけで材木が増えるなんて儲けもの。伸びた鼻を切り落として売れば、仕入れ値なしの丸儲けで材木店を営めます。抜け目のないピノッキオはせつせと嘘をつき、大金持ちになりました。いい感じです。

いい感じではありますが、この事業のサステナビリティはどうだろう——と、ロダリーと子どもたちは考えました。嘘って無限に思いつくものでしょうか。そんなことないでしょう。ネタ切れやスランプに陥ることもあるでしょう。それでも嘘をつき続けなくては商売が立ちゆかなくなります。追い詰められたピノッキオは、嘘を求めて歩き回り、ほかの人の嘘をそのまま流用して間に合わせようとしますが、たいした嘘ではないので鼻はちょっぴりしか伸びてくれません。

そこでピノッキオ(とロダリーと子どもたち)は考えました。これってひとりで解決しなきゃいけない問題じゃないよね。ほかの人が考えた嘘でも鼻が

伸びることはわかっています。すごい嘘を考えてくれる人を探してきて力を借りればいいのです。ピノッキオは1日8時間労働の月給契約で嘘を考えてくれる相談役を雇うことで危機を切り抜け、勢いに乗って白手袋をはめて黄金のノコギリで鼻を切る専門の職人まで抱えるに至ります。このふたりのお給料は、会社のウィークポイントについての口止め料を上乘せしているので、ほかの従業員よりお高めなのだそうです。



【『羊飼いの指輪』日本語版表紙】

出典：<https://amzn.asia/d/gdIWcDK>

さて、これでハッピーエンドにしてもいいでしょうか。もう次の問題はおきないのでしょうか。経営者としてピノッキオはどのように評価されているのでしょうか。大きなお金はピノッキオにどんな変化をもたらすでしょうか。ピノッキオの魔法を不可逆なものであると妄信していいのでしょうか。もし、嘘で増やした財産に真実が作用したら、いったいなにが起きるのでしょうか。

もし……なら、どうなるだろう。この問いからおはなしを生じさせることについて、ロダリーはくこ

れは、もはや、ナンセンスの立場ではない、とわたしは思う。明らかに、現実との積極的な関係を設定するためのファンタジーの用法に立脚している」と述べています。

木の人形が生きて動いて、しかも嘘をつくたびにその鼻が伸びるというのは不条理ですが、この不条理な設定を起点にして導き出されたおはなしには、その作者の考え方が反映されています。

世界は人間の背の高さで見つめることができる。しかし、雲の高さからも見つめることができる(飛行機に乗ればやさしい)。現実には正門からはいることもできるし、小窓から——この方がたのしい——しのび込むこともできる。

(『ファンタジーの文法』6章)

子どもたちの行く手にはさまざまな困難が待ち受けています。それにひとりで立ち向かうべきときが迫るまでに、まずはピノッキオの試行錯誤につきあうところから始めておけば、子どもたちには愉快でしょうし、成長を見守る私たちおとなも安心です。

また、おはなしに子どもを参加させることについて、ロダリーは「心たのしい状況におき、忘れがたい冒険を敢行させ、満足と報酬の未来を示してやるために、このあそびを使うのだとしたら、これは計り知れないほど大きなものになる」と述べました。このあそびはおとなにも効き目がありそうです。

私たちおとなの多くには、現実の失敗を反芻して膝を抱える夜が頻繁にやってきます。こんなときには、空想の小窓から現実をしのび出て、おはなしのなかで成功体験を求めてみるのもいいでしょう。コッローディのピノッキオについて行ってジェペットじいさんの温かな抱擁を追体験するもよし、ロダリーのピノッキオを追ってスリリングな綱渡りに興じるもよし、じぶん自身のピノッキオと脱線して新しいおはなしを創作すれば、きっと天国のロダリー先生が喜ばれることでしょう。

もしくは、私たちおとなは、もっとビターなおはなしを試してもいいかも知れません。たとえば、暗い時代の寒い都市を舞台に、じぶんそっくりに憂鬱そうなペンギンを連れ歩いてみたりして。

ロシア語で作品を書くクルコフ氏はまず欧米各国で注目を集め、その成功から本国ウクライナでも人気を獲得したそうです。彼の描くソ連崩壊後のウクライナを私は知りません。主人公たちの見ている世界にピントが合うまで、かなり時間がかかりました。そのなかで〈憂鬱症のペンギン〉だけは最初から慕わしかった。きっとロダリーと相通じるファンタジーの気配を強く感じたからでしょう。私にはまだキーウよりもおとぎの国の方が身近なようです。

もし、小説家がペンギンと同居していたら、どんなことが起きるんだろう？

この〈ファンタスティックな仮定〉をかすがいとして、不穏な見知らぬ街角をうろつき回るような読書を終えられたとき、皆さまがどんなことを思いながらロダリーのイタリアに帰ってきてくださるのか気になります。

<参考文献>

『ファンタジーの文法』 ジャンニ・ロダリー 窪田富男訳 筑摩書房、1990

『魔法使いの指輪』 ジャンニ・ロダリー 関口英子訳 光文社、2011

『ペンギンの憂鬱』 アンドレイ・クルコフ 沼野恭子訳 新潮社、2004

(元当館語学講師)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスン。多くの方にご利用頂いています。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/